



育て上手なリーダーになる心得

人材育成サービスを提供するIT企業が管理職1070名の意識調査を行ったところ、管理職の最大の悩みは「部下がなかなか育たない」ことだという。新人や部下を育てていくためには、どのような考えとコミュニケーションの仕方が必要なのだろうか。

取材・文 上阪徹



うまさか・とあるブックライター。1966年兵庫県生まれ、89年早稲田大学商学部卒業。ワールド・リクルート・グループなどを経て、94年フリーランスに。近著「1人で心が震える プロの言葉100」（東洋経済新報社）、「引き出す力」（河出書房新社）

基礎編

己の弱さを見せ、学ぶ姿が フォロワーシップを生む

株式会社チームボックス 代表取締役 中竹竜一

経営者といっても、
育成は素人である

——中竹さんは、一人のリーダーが
チームを引っ張るのではなく、メン
バー一人ひとりがリーダーになり、
全員が主体的、自律的に動く。そんな
組織が作れるリーダーを推奨され

てきました。キーワードには「弱さを
さらけ出す勇氣」と「学ぶ姿勢」を拳
げておられます。

中竹 人間は観察力に優れていま
す。作り笑いはほぼ見抜ける、とも
言われています。背伸びも知ったか
ぶりも建前も、実は見抜かれている
と思ったほうがいい。人間は完璧

じゃないんです。だから、自分が
引っ張っていかないと、などと思わ
なくてもいいんです。良かれと思っ
て無理して引っ張っていいこうとして

も、まわりからは、どうしてそんな
に強かったり、完璧を求めたりして
いるのか、と思われるかもしれ
ません。むしろ弱さはさらけ出した

ほうがいい。それは本当のことを伝
えることであり、これが信用につな
がるんです。

そして人を育てるとはどういうこ
とかというと、学びを支援すること
です。ここでも完璧な形はありませ
んから、どうすれば学びを支援でき
るのか、探求し続けることが重要に

早稲田大学ラグビーラグビー部監督
として二年連続の全国優勝を果
たし、ラグビーU20日本代表の
ヘッドコーチも務めた手腕を持
つ中竹氏。部下を育てるために
は、自分の弱さをさらけ出す必
要があるという。ミレニアル世
代やZ世代の若手社員たちと信
頼関係を築くヒントを探る。